

## 〔最終講義〕

私の学問修業 —1987-2017—  
—比較家族思想史・生活政治学—

杉 田 孝 夫

## はじめに

私は36歳のとき、1987年10月に本学児童学科に着任し、それから足掛け30年、この建物のなかで過ごしてきました。これまでの人生の半分近くの時間を過ごしたことになります。私は1951年7月12日に岩手県江刺郡梁川村で生まれ、1970年4月に山形大学に入学するまでは岩手県内各地で育ちました。小学校は4カ所移りました。親が公務員で転勤族だったからです。どこか「根無し草」的なところがあるのはそのせいです。大学に入ってから、学部は山形、大学院修士課程は東京教育大、博士課程は東京都立大学と転々と修行して歩いたという感じです。だから一カ所にずっと居るということに小さいときからあこがれを抱いておりました。お茶大に就職するまでが放浪の35年とすれば、お茶大での30年は定住の30年と言えます。しかし習性とは恐ろしいもので、かなり長い間やはり部外者という意識がありました。この数年、随分長く過ごしたなという気分とともに、いつのまにか内部の人間の感覚になっている自分に気づいて、微妙な気分を感じておりました。

最終講義の場を戴いたので、この機会に私のこれまでの来歴を振り返ってみたいと思います。

## 1. 岩手で生まれ育って

戸籍を見ると、昭和26（1951）年7月12日に岩手県江刺郡梁川村で生まれたことになっています。そのころ父は盛岡地方法務局大迫出張所長をしていましたから、私は母の実家で生まれ、

その知らせを聞いた父が数日して梁川（やながわ）に行き、誕生の8日後の7月20日に父が梁川村役場に出生届けをしたようです。戸籍からはそのように解釈できます。父は梁川の隣村の人首（ひとかべ）村の出です。父方の祖父は小学校の校長を経て村長をしていました。祖母は岩手県の日赤看護婦第一号で日露戦争の従軍看護婦でした。男の子3人を医者にして水沢に病院を作る計画をもっていたようです。戦前の教育ママだったようで、3人の息子は盛岡中学に入りましたが、その後が続きませんでした。医者になったのは長男一人だけでした。娘たちは看護婦か教員です。今思うと、父や父の弟は、どうも戦争と学資不足で、おもうような人生を歩めなかったように見えます。もっとも父の人生の狂いのお陰で私はこの世に存在することになったわけです。

小学校に入る前の頃の記憶は断片的です。5歳までは早池峰山の麓の稗貫郡大迫町で暮らしました。いまはエーデルワインや早池峯神楽で有名ですが、かつては盛岡から遠野へ向かう街道の宿場で、その名残がまだわずかに残っていました。戦後とはいえ高度経済成長期以前は、生活そのものが戦前との連続性のほうが強かったように思います。近くの里山に風呂の薪にする杉の落ち葉を拾いに行ったり、田んぼでイナゴ取りをしたり、冬は道路で下駄スケートをしたことなどを思い出します。

そのあと一関の近くの東磐井郡東山町長坂に引っ越しました。記憶にあるのは裏山の竹林でチャンバラごっこや探検ごっこをして遊んでいる光景とか、夏にはだかで川でつりをしている

姿とか、冬にソリや竹スキーで坂道を滑っている光景などです。よく裏山のでっぺんから向いの山の絵を描いていました。近くにパン工場があり、よく覗きにいったのは、パンの耳をもらって食べていました。碎石工場やセメント工場があり、なんだかワクワクした記憶があります。あとで知ったことですが、そこは宮澤賢治が最初につとめた碎石工場でした。私は1958年4月に長坂小学校に入学しましたが、二年生になったばかりとき、1959年4月10日、今の天皇が皇太子のとき正田美智子さんと結婚をし、そのパレードの様子を、近くの文房具屋のテレビで見たのを覚えています。

そのすぐあとに県北の九戸郡種市町に引っ越しました。そこで翌年1960年5月23日、チリ地震津波を目撃します。切り立った崖の上から津波を見ていました。それまで見たこともないほど沖まで潮がひき、しばらくすると波が押し寄せ、港の防波堤が波にかくれ、岸辺の作業小屋がいつのまにか消えてなくなっていました。種市には小学4年までいましたが、岩泉正雄先生という版画の指導に熱心な先生が担任で、私も年中放課後に版画を彫っていました。グループでおおきな線路工事の版画を彫って県の版画大会で金賞をとりました。私は道路工事を題材に個人の作品も出しました。高度経済成長の波は田舎の公共事業にも及び始めていました。町の真ん中の国道45号線の舗装工事が行われており、私は、ブルドーザーの動きをじっと見ていました。その作品は小中の部で3位になりました。大きな賞状をもらったのは後にも先にもそのときだけです。

その後、県南の北上（黒沢尻）に引っ越しました。そのころはプラモデル作りと飛行機づくりに熱中していました。ちょうど池田勇人が総理大臣になったころです。池田勇人が国会答弁をしている様子をたまたまテレビで見たのを覚えています。1962年11月のキューバ危機もテレビで知りました。キューバ危機のときは、米ソの核戦争になったらと思うと、怖さのあまり、朝学習の小テストの紙の裏に、フルシチョフと

ケネディのマンガを書いて核戦争反対と書いたのを覚えています。1963年11月22日衛星中継が実験的に開始されたとき、最初に入ってきたニュースは、ケネディ大統領暗殺の映像でした。

1964年に北上中学校に入学し、その年、東京オリンピックがあり、国道4号線に出て聖火を迎え送りました。道路沿いにサルビアとマリーゴールドが植えられたのはそのときが初めてだと思います。それ以降日本中秋にはサルビアとマリーゴールドが咲くようになります。そのころから数年の間、ラジオのダイヤルを回せば、どこかでかならずビートルズの曲が流れているという時代になります。

1967年に盛岡第一高校に入学しました。3年間、一時間かけて、汽車通学でした。高校では国語科と社会科の科目はどれも好きで、なかでも歴史が好きで得意でした。それで文学部の西洋史を志望しました。一期校の北大は失敗し、二期校の山形大学に1970年に入りました。そのころはとにかく家を出たいという気持ちだけでした。

## 2. 山形大学時代

まだ大学紛争の残り火が熱をもっていてなんともいいようなない独特の雰囲気でした。授業料は年間1万2千円でした。家からの仕送りは1万5千円、これは下宿代に充て、育英会の奨学金月8千円と家庭教師のアルバイト週2回で月6千円前後で合計1万5千円で一月暮らしました。毎週日曜には千円札をもって本屋に行って数冊新書と文庫を買って一週間読むという生活でした。お金が足りなくなれば単発のアルバイトをして稼ぐといった具合で、実にのんきでした。当時の山形大学は、まだ大正教養主義の雰囲気が残っていました。旧制高校を母体にしてできた文理学部から理学部と文学部の二学部に分離独立してまだ4年目でしたし、文学部の建物は旧制山形高等学校の建物でしたから、学生たちもどこか旧制高校の学生のような気分

と生活スタイルで、それをよしとしていたようなところがありました。教員も似たような雰囲気でした。クラス担任の若きニーチェ研究者山崎庸佑先生は高知出身で酒神バックスそのものでした。教養課程から専門課程に進学してフランス現代史の山極潔先生のゼミと西洋中世史の原田栄一先生のゼミに入り、西洋史を専攻しました。私は第二外国語がドイツ語だったので、ドイツ近現代史を勉強しました。東北大学の法制史の世良晃四郎先生や哲学史の柴田治三郎先生、成蹊大学のドイツ史の村瀬興雄先生などの講義を集中講義で聴きました。ゼミではペンギンブックスのE.H.Carrの*What is History*とかHermann Rauschningの*The Revolution of Nihilism*を読み、卒論では1933年1月30日のナチの政権掌握から1934年6月30日事件までのナチのグライヒシュルトゥングの過程つまりナチ化のプロセスを描き、8月のヒンデンプルクの死とともにヒトラーがフューラーに就任するまでの一年半余の過程を論じました。先輩たちはみな労働運動や社会主義運動の歴史を卒論のテーマにしていたので、私は全く反対のナショナリズムとナチズムを選択しました。

丸山眞男の『現代政治の思想と行動』を、着任したばかりの和田守先生の政治学のゼミで読んで、政治思想史は面白いと思い、こうした学問的な思考を理解し身につけることができたらいいだろうなと思いました。そのころは漠然と高校の世界史の教師になるのかなと思っていました。

山極先生に相談したら文学部だけでなく法学部の大学院も選択肢の一つだと言われ、4年の秋に東北の法学部の大学院を受験したのですが失敗し、岩手に帰るか専攻科生になってもう一年いるか、どうしようか考えていたら、東京教育大を出て着任したばかりの和田守先生が、東京教育大に行ったらと、アドヴァイスを下さり、正月明けだったか集中講義で来ていた田中浩先生に引き合わせてくれました。それがきっかけで東京教育大に行くことになりました。ただ東京教育大学の文学部の大学院入試の出願締切はすでに過ぎていたので、研究生の出願をしました。

### 3. 東京教育大学時代

東京教育大の研究生になって最初に田中浩先生からこれを訳せと言われてC.S.Pinsonの*Modern Germany*を渡されました。一年ほどかけて全訳しました。レポート用紙に訳して、毎月末、できた分を提出しました。翌年大学院に入ると今度はKiesewetterの*Von Luther zu Hitler*を訳せと渡されました。これは途中で放棄してしまいました。タイトルからしてははじめから結論が見えているような感じがして、それほど面白いと思わなかったことありますが、修論の準備で余裕がなくなったことと、訳されるほどドイツ語の力がまだついていなかったのだと思います。

田中浩先生のゼミでは当時のもっぱらCarl Schmittの*Diktatur*を読みました。松本三之介先生のゼミではJ.S.Millの*On Liberty*を中村政直訳と対比して読むという面白い読み方をしました。またNajitaの*Japan*も興味深く読みました。両先生とも毎週のゼミの他に月一回読書会があり、田中先生の読書会ではボルケナウの『封建的世界像から近代的世界像へ』とかハーバーマスの『理論と実践』などを読み、松本先生の読書会では松沢弘陽の『日本社会主義の思想』、井筒俊彦の『イスラム思想史』やアレントの『人間の条件』、Leo Strausの*Natural Right and History*やJ.G.A.Pocockの*Politics, Language, and Time*などを読み、すいぶん良い勉強になりました。学部では歴史学だったので、政治学分野の研究の基礎教養をまずは身につけなければと思い、最初の2年間くらいは、丸山眞男、南原繁、福田歓一、松本三之介、有賀弘、高島通敏、松下圭一、佐々木毅など、戦後の代表的な政治思想史の研究書を読むのに明け暮れた感じです。

修論は、「アルトゥール・メラール・ファン・デン・ブルックの保守革命」という論文を書きました。メラールはドストエフスキーのドイツ語版全集を最初に編集した人ですが、第三帝国という言葉をも最初に使ったのも彼です。第一次世

界大戦直後に保守革命を論じた人で、ナチズムのルーツとしてのヴァイマル期の保守革命論の1人として解釈したものです。結局教育大には研究生として1年、修士課程の院生として3年おりました。その結果、私は東京教育大学大学院の最後の修了生として、修了証を代表してもらいました。専攻の順番などの巡り合わせだったと思います。

#### 4. 東京都立大学時代

一年浪人して、博士課程は東京都立大学に行きました。教育大はなくなり、筑波大学ができ、そちらにいく選択肢もあったのですが、指導教員の二人は筑波闘争で反対派であったし、東大、静岡に移ったので、どこか行き先を探さなければなりません。

結局1979年に都立大学の博士課程に入学し、バークの保守主義をやっていた半澤孝麿先生の指導をうけることになりました。20世紀初めをやっていると、やはり19世紀初めにまで遡らなければダメかなという感じをもったからです。特にドイツ思想ではドイツ観念論がその後20世紀まで強い影響力をもちますから、そこを押さえないとなんだか隔靴搔痒といった感じを拭えないわけです。

それでも博士課程の最初の一年はシュペングラーにしようか、ウェーバーにしようか、シュミットにしようかまだ迷っていましたが、1920年代のドイツ思想に関しては、その当時自分自身のなかで見取り図ができてしまっていた感じがして、このさき続けても余り進歩はないなと思い、博士課程の2年目に思い切って100年遡ることに決めました。しかしカントにするかフィヒテにするか、ヘーゲルにするか、これは大問題でしたが、結局先行研究に南原繁の研究があるフィヒテを研究テーマに選びました。これが今日までつづく私の研究の出発点です。フィヒテを選んだのはやはり学部、修士のころからのナショナリズム研究があったからだと思います。当時ドイツ観念論の思想家を研究対象

に選ぶとなるとカントかヘーゲルかといった感が強く、フィヒテはカントとヘーゲルの間に挟まれ、後には学派もできなかったというイメージが強かったので、そのイメージを払拭するようなフィヒテ研究をしようと決めたわけです。そのさい南原フィヒテとはちがったフィヒテをどう描けるかが課題でした。南原の問題点は分かっていました。彼の研究は基本的に1920年代の研究成果に基づいています。その限界を突破できないかという戦略です。しかし南原フィヒテのすごさは、南原が生きた時代との緊張関係と問題意識が南原フィヒテを支えています。その意味で南原フィヒテは、古典的地位を獲得しえたと言えます。南原フィヒテは南原の時代批判の書となっています。それと同じことはできませんし、それを超えることもできません。南原の仕事は政治哲学あるいは政治理論史です。それに対して私はフィヒテをとことん歴史的個性としてとらえ、政治思想史として再構成してみようという形で研究を始めました。これが私のフィヒテ研究のオリジナリティです。しかしこれも後からの整理です。その当時はもっと混沌としていたはずです。自分の研究の方向性にある種の展望と確信を得たのは、ずっと後のことですが、そのころ、もっと自信を持って、と励ましてくれたのは有賀弘先生でした。

博士課程での奨学金貸与の期間が切れた後は、食べて行かなければなりませんので、予備校で世界史を教え始めておりました。けっこう準備が大変で、研究にさく時間もあまりとれなくなりました。自分が本当に学問で生きていくだけの資格があるのかどうなのか自信がなくなります。それでほんとうに学問が好きなのかどうか自分をためしてみました。予備校の仕事も結構きつので、あえて勉強はしないで半年すごしてみました。そしたら本を読まずにいられない衝動というか、精神的飢餓状態というか、猛烈に本を読みたくなってきました。そのとき自分は学問で生きていけるとたいした根拠もなく思いました。予備校で世界史を教えて喰えれば、あとは非常勤の一つもあればなんとか学会



で報告したり論文をかくことはできるのだから、自分で勉強をつづけていくことができる。それでいいと腹をくくりました。34歳くらいのことです。ほどなく開学して間もない放送大学の「政治学入門」の面接授業の非常勤講師になりました。

## 5. 1987-1992 家政学部児童学科児童福祉講座

お茶大がどんなところかほとんど知りませんでしたし、家政学部児童学科がどんなところかももちろんしりません。子どもと親子・家族の哲学的思想的考察ということが提示された注文でした。あとから聞いたところでは、まったく異質な人間を採用し、ハイブリッドを目指すということが学科の採用方針だったということです。こちらとしては思想史をやれるならば、どこでもいいという気分でした。必要な書類を6月ごろ提出して、夏には、担当するかもしれない科目を想定した準備を始めていたと思います。9月の教授会投票、評議会投票が済んで、1987年10月1日着任でした。

茗荷谷の旧東京教育大学で1974年から1978年まで4年間勉強していたので、また茗荷谷に戻ってきたことになにか不思議な縁を覚えたものです。その縁をつないでくださったのは、森田明先生でした。森田先生は教育大時代に憲法特論のゼミを非常勤で担当しており、私も誘われて参加したのが、付き合いのはじまりでした。教育大がなくなった後も、上智大のブライトンシュタイン神父のドイツ語文献の読書会を紹介してくださり、そこでドイツ語読解のトレーニングを受けました。森田先生はさまざまな意味で忘れられない恩人です。

教育大が解体されるとき、机や書架などの備品は近くの国立大学に移管されました。教育大法律政治学教室の書架の一部は、お茶大の森田先生が引き取りました。その後その書架は、本館改修のさい、私の研究室（本302室）に移設されました。教育大の備品ラベルが貼られてい

るのですぐわかります。

ちなみに茗荷谷付近でその当時から今日まで続いている食べ物屋は、建物は変わってしまいましたが、そば屋の「信濃路」、中華料理の「金門飯店」です。

いまの筑波大学・放送大学の建物は、かつての東京教育大学文学部の建物です。文京区の体育館のある場所に理学部がありました。旧文学部の建物には、お茶大に就職する前年から非常勤をしていた放送大学の東京第二学習センターがこの建物に入っていたので、就職したあとも3年ほど面接授業担当で通ったことを思い出します。

比較家族思想史研究室の看板をもらいましたが、さてどう組み立てていくか、すべてはゼロからのスタートでした。西洋政治思想史の講義を範型に、前期は西洋家族思想史、後期は日本家族思想史をやることにしました。自分のなかで、比較していこうと決めました。日本のことをやるときには頭の中では西洋を意識しながら、日本の文脈で家族を考える、西洋をやるときには頭の中では日本を念頭において、しかし西洋の文脈の中で家族を考える。語られるのは日本あるいは西洋の家族だけでも、私のなかではいつも空間的な比較考察と相対化が行われるわけです。この思考方法は、いまに至るまで基本的に変っていないように思います。これに近代以前と近代以後という時間軸での比較を重ねられます。

10月に着任でしたので最初の半年は、特殊講義を一つと演習と卒論指導だけで、春からの講義準備で過ごしました。それに大学院入試に第二外国語がまだありましたので、数年の間しばらくドイツ語とフランス語の出題をしました。大学院の演習は、語学試験対策のような感じで、ドイツ語とフランス語の文献講読を数年やりました。学部の演習では家族論の文献講読です。ほとんど自分の勉強のためという感じでした。そのころイギリス、フランス、アメリカで家族史のあたらしい研究成果が続々と出ていたので、それらを勉強しながら、思想史のテキストを重ねあわせて、近代家族の概念の成立事情を

考えようとしていました。

着任してすぐ、当時、政府は、溜りすぎた外貨を消費するために、国立大学に洋書購入の要請を行い、お茶大にも1学科あたり100万円が配分されました。学科会議で、研究室準備ということでフィヒテのアカデミー版全集既刊分24冊購入を許されました。ちょう100万円です。それとは別に当時研究費は年100万円配分されました。それでまず研究室の改装をしてもらいました。与えられた部屋が研究室2個分の面積の部屋だったので、半分に仕切って、演習室と研究室にしました。

お茶大でのフィヒテ研究の開始です。学内には私の研究に必要な文献はまったくといってよいくらいありませんでした。次年度から研究書・辞書・全集を研究費で順次買いそろえていきました。児童学科時代は、通年で、講義1（比較家族思想史4単位を、前期は西洋家族思想史、後期は日本家族思想史というかたちで行いました）、学部演習1、大学院演習1、その他オムニバス科目2科目前後という程度で、今よりも落ち着いて勉強ができる雰囲気の中にあつたように思います。3、4年してから児童福祉の講義も担当することになり、西洋児童福祉思想史と日本児童福祉思想史の講義も行いました。そのころ児童の権利条約の扱いが問題になっており、研究会も組織され、誘われたので参加し、その思想的な意味について「児童の権利条約の思想的背景」という小論文を書きました。最初の数年はほんとうに自転車操業そのものでしたが、それでもずいぶんと本を読めましたし、いろいろあたらしい勉強ができました。しかし論文も書かなければなりません。どこが論文の主題になりうるか、どこなら自分が書く必然性があり、かつ書けるかを考え、結局ドイツの18世紀から19世紀あたりならいけそうだとということになりました。婚姻結合および家族関係にかんして、カント、フィヒテ、ヘーゲルを並べて考えているうちに、愛に関しては、カントにおいては記述がなく、契約としての婚姻契約だけで説明され、フィヒテでは、夫の大度と妻の愛の

結合という一体性が強調され、ヘーゲルでは夫と妻の相互の愛とその弁証法としての子の誕生という家族の完成という図式が浮かんできました。そこでは家族の解体は子の独立にほかなりません。さらにカントでは家の身分制的構造のなかに、夫婦と子どもの家族の圏が入れ子になっているのに、フィヒテでは家はたんなる器あるいは私的自由の圏と捉えられ、ヘーゲルでは家は否定すべき世襲身分制の対象でしかなく、いきなり愛からその弁証法的構成としての家族が主題化されるという、発展的図式がテキストから抽出できたので、これぞ近代家族観念の形成過程そのものだと考えました。しかもこの枠組みでは当時誰も書いていないようなので、これで論文を書くことにしました。最初にフィヒテの家族思想の論文を書き、日本フィヒテ協会で報告しました。そのあと、カント、フィヒテ、ヘーゲルの三人を扱った包括的な報告を日本政治学会で行いました。2000年にカントの家族観を書き、2003年にヘーゲル学会で家族観のシンポジウムで呼ばれたのでそこでヘーゲルの家族観の意味をドイツにおける個人主義的市民社会の再生産の論理として捉え、報告しました。あとはいろいろ肉づけをすれば、一冊になると思ったのですが、その後忙しくてそのままになっています。2010年に日本哲学会で「家族と親密圏」というシンポジウムの提題者になったとき、しばらくぶりで家族論を再検討しました。そろそろまとめる時期だと思いつつも、他の溜っている仕事をかたづけなければならず、今日に至っています。退職してからの卒業論文になってしまったのは少し残念です。

就職する前からのフィヒテの政治思想研究は、いつのまにか中断状態になってしまいました。昼は比較家族思想史が生業になってしまったので、政治思想史は夜の内職仕事のようになりました。しょうがないから、ゆっくり家で原書を読むことにしましたが、90年頃フレデリック・バイザーの本が出たので、これを訳しながら読んでみました。一年ほどで本文を全訳できました。翻訳刊行するに値すると思ったのですが、出版

社のあてがあるわけでもないのに、本棚に原稿とフロッピーを棚上げということになりました。幸い2006年になって出版してくれる出版社が現れて、2010年にはめでたく刊行されました。これは自分では良い仕事をしたと思っているのですが、制度的にはやはり夜の内職仕事です。

94年頃フィヒテ全集の翻訳刊行の企画が動き始め、私も参加することになりました。95年に自然法論とカント平和論論評からなる第6巻がまず最初に刊行されました。私は平和論論評の翻訳を担当しました。そのほかに16、17、21巻に収められる1806～7年と1812年～13年の政治論の未刊行テキストの翻訳を分担することになりましたが、ずいぶんと時間がかかりました。2009年、2013年、2014年に、21巻、17巻、16巻がようやく刊行され、全集も2016年秋に完結しました。この翻訳作業があったので私のフィヒテ研究は内職仕事としてずっと続けてこられたと思います。フィヒテの専門学会での折々のシンポジウムで報告する機会が与えられ、なんとか細々ながら続けてくることができました。退職後は足りないところを補って退職後の二冊目の本にしたいと考えています。2012年にドイツでのアカデミー版全集が完結したので、いまは本にするのがその後になって良かったと思っています。

ドイツ語は修士課程の学生のころから、上智大学のドイツ史のブライトンシュタイン神父（70年代の半ばから90年代の初めころまで）のところで勉強し、そのあと90年代の終わりころまで、哲学のアムブルスター神父に習いました。ならったと言っても、ドイツ語の論文を音読し、それを日本語に訳す。どのように訳すのがドイツ語のニュアンスをもっともよく表すかを検討するわけです。これはほんとうにいい修行になりました。

ドイツ観念論の政治思想研究をしていて、いちばん困ったのは、哲学研究の蓄積が日本では相当にあるわけですが、私にそれを消化するための教養形成が欠如していたことです。自分の研究が政治学の世界ではなんとか通用するかも

しれないにしても、ドイツ観念論を研究している哲学研究者たちに通じなければやはりだめだろうなと思い、まずフィヒテ協会に入って武者修行をしました。1990年に「フィヒテにおけるHausとFamilie」を報告をしました。これが最初の学会報告です。翌年お茶大の人文科学紀要に投稿しました。一般研究発表というのは、これともう一つやはりフィヒテ協会大会で1999年に報告した「フィヒテのPatriotismus」の二つだけです。フィヒテ協会で学びそれを読解の手がかりにできるようになれば、研究を深めることができるだろうと考えたからです。フィヒテのほかにヘーゲルやカントの個別学会にも情報収集と勉強のつもりで参加しました。最初はチンプンカンプンでしたが、現在にいたるまで、自分の研究の発表の場や研究情報の交換の場として役立っています。90年代以降、政治学と哲学の学会に足場を置いて、自分の政治思想史研究の方法をつくってきました。他の学会に出ると最初の頃は違いやそれぞれの学会方言だけが目につき、途方にくれるものですが、それぞれの研究作法や問題意識、使用言語の違いをそれぞれの学問制度のヒストリーの中で理解し、相対化して見るスタンスを獲得すると、問題の所在も課題も、ある種の共属性をもって見えてきます。これは良い勉強になったと思います。

80年代半ばからワープロが研究者の間で使われ始めますが、私は80年代末になってワープロ（富士通のオアシス）を使い始めます。字が下手で、原稿用紙一枚仕上げるのに、何枚も書き損じを散らかす私にとっては天恵でした。論文作成が楽になりました。90年代からはパソコンが普及し始め、95年ころにワープロからパソコン（マック）に乗り換えました。まだ性能は悪かったです。もっぱら文書作成用でした。インターネットやメールは97年ころからです。当時のマックはしょっちゅう爆弾マークが出てきて往生しました。アメリカでは小学生でも使えるというので、マックを使いはじめ、なんとかパソコンに乗り遅れずに済みました。96、97年頃、生活工学の會川先生のイニシアティブで学部内

LANを敷設しましたが、お茶大の部局のなかでは一番早かったと記憶しています。

## 6. 1992-2017 生活科学部人間生活学科 生活社会科学講座

### (1) 1992-2000

92年に家政学部の改組がなされ、児童・食物・被服・家庭経営の4学科それぞれ小講座制だったのを、生活環境学科と人間生活学科の2学科、それぞれ生活環境学講座と食物科学講座の2大講座、発達臨床学講座、生活文化学講座、生活社会科学講座の3大講座に、改組したわけです。私は着任してからまだ5年目の若僧で、比較家族思想史と児童福祉を始めてまだ間もなかったので、のぼりかけた梯子を外されたような気分でした。だれもどうしろとも言わないし、自分で良い選択をしないとしか言わないのでとても困りました。ストレスで、たしか円形脱毛症になりました。こうなったら自分が立ち行く方法がこの学部で可能か、あるいはどこかよその大学にポストを探すしかないと思いました。よくみると家庭経営学科から原論講座が人類学講座として抜けて行くようだし、こちらの児童福祉講座をもって家庭経営学科の2講座と合併し、社会科学系の講座にすればよいのではないかと、袖井孝子先生と湯沢雍彦に相談したのを記憶しております。講座の名称をどうするか袖井先生と相談しました。生活社会学にするか生活社会科学にするかに絞られましたが、法律学も経済学もあるのだからということで、生活社会科学講座という名称になりました。

お茶大にはじめて社会科学の名称を冠する教育研究単位ができたわけです。児童学科児童福祉講座教授・助教授ポスト2と旧家庭経営学科の家族社会学1、家庭科教育1、家庭経済・家庭経営2、家族法1、経済学1(教養)技官1を合わせてできました。ジェンダー研究センターの原先生・館先生との連携も念頭におきました。

その後文教育学部改組で人間社会科学科がで

きます。さらに大学院改組で生活開発学系ができたとき、学位名称に社会科学が加えられ、さらにその後2007年私が生活開発科学系長のときに、ジェンダー社会科学専攻ができます。大学院に社会科学とジェンダーの名称のついた専攻ができたわけです。当時はなんとなく座りが悪い感じがしていましたが、最近では内部的にも外部的にもすっかり定着した感じがします。この枠組みの中で、教育と研究の成果がたくさん生まれていくことを願っております。

私が着任した1987年頃、家政学部の建物は三学部で一番古く、中庭は草ぼうぼうで夏は窓を開けていると蚊に悩まされました。家政学部の旧来の学問構造も建物も時代に合わなくなってきたということを象徴するような風景でした。それはまた志願者数の長期低落傾向に現れていました。個別に教育・研究をしている教員たちは新しいこと、需要のあることを目指して仕事をしているわけですが、自分たちのいる建物や教育体系と自分たち自身との間にズレを感じるようになっていたということなのだと思います。いま思うことは、改組をやって成功したかと言われれば、結果論的には成功したといえる側面のほうが勝っています。しかしやり方にもうすこし工夫があったのではなかったかという印象を拭えません。保存しておいたほうがよかったものまで失ってしまったのではないかという気持ちが若干あります。たとえば家政学部という看板は変えなくてもよかったかもしれませんし、家政学原論という科目は、なくさなかったほうがよかったのではないかと思うわけです。この二つは学部教授会での決議によるものです。私は前者には反対でしたし、後者には疑問でしたが、では自分が担当するかいわれれば、そこまでの余裕はなく、二の足を踏むような感じでしたし、引き受けてくれといわれたわけでもないで、関与せずのスタンスでした。しかしこれは今思うと私がやりたいといってもよかったのかもしれない。この二つを残しておけば、家政学の遺産と資産を制度的にも失うこともなく、また時代状況が変わっても柔軟に対



応するためのよりどころになる。学部にとっての家宝だったのかもしれないということを、思います。まことにミネルヴァのフクロウは夕暮れ時に飛び立つという言葉の通りです。

ともあれ1993年から新しい学部学科で新生を迎え、新しいカリキュラムの整備を始めました。形が落ち着くまで2～3年かかったかもしれませんが、しかしかなりの部分は旧来の科目の継承ですから、以前からいた先生方自身ではあまり変化がなかったと思います。一番カルチャーショックを受けたのはわたしだったのではないかと思います。旧制度の最後の学年が卒業するのが3年後ですから、その間は両方の学生の教育つまり二つのカリキュラムの运营管理をしなければなりません。1993年から97年までは結構たいへんでした。97年3月に新学部最初の卒業生がでます。改組前にくらべ随分忙しくなったような気分でした。この時期は入試委員やカリキュラム委員、それに講座主任になったので、以前は週2日しか大学にきていませんでしたが、週4日こなしなければならなくなりました。2000年代に入るとほぼ毎日、しかも朝から晩まで研究室で過ごすようになります。

児童学科の担当部分がなくなるので、比較家族思想史だけは残し、児童福祉はこれで止めました。その代わりに生活政治学と新規に政治学入門を開設しました。全学的に公務員志願者が多いのに、一般教養に政治学の科目がなかったからです。控え目に政治学入門という名称にしました。そのころは3学部で80人近くの学生が受講していました。生活政治学、政治学入門、比較家思想史が私のコア講義になります。

改組にさいして始めたことでいまになってもよかったと思うことは、講座で学生と教員全員が会員になる生活社会科学研究会をつくり、『生活社会科学研究』という雑誌をつくったことです。きっかけは、その3年前から家庭経営学科では院生の論文を掲載するために『家庭経営学論集』という雑誌をつくっていました。費用は教員がポケットマネーから出していたようです。これをどうするかということが講座会議

の議題になり、私が、学生・教員それぞれ年会費制にすれば、雑誌を継続的に刊行できると提案し、採用されました。『家庭経営論集』（第1号は1991年3月刊）は3号でおわりましたが、『生活社会科学研究』は『家庭経営学論集』を引きつぐようなかたちでスタートし、最新号は第23号になります。これをみれば、講座の性格と歴史がわかります。講座の記録誌としても今後も長く続くことを祈ります。講座、専攻のあらゆる教育研究データを毎年掲載しつづければ、いずれお茶大の社会科学領域の歴史を振り返るとき、最重要の資料になると思います。

2000年9月1日から2001年6月30日まで文部省の長期在外研究でドイツに派遣されることになりました。娘が大学受験だったので、妻と娘を残し、ミュンヘンで中学一年の息子と二人暮らしです。生まれてはじめて炊事・洗濯・アイロンがけ、掃除の家事一切をしました。これは良い経験でした。息子と親子げんかをしながらの一年でしたが、ドイツの空気を吸いながら、ドイツ語の本を読むことができた10ヶ月でした。遅れていたフィヒテの翻訳の一つもそこでやりました。

## (2) 2001年－2010年 本館改修と法人化

1999年から2001年まで総合研究棟新設、2002年から2005年まで本館の改修工事が行われ、学部の施設が一新されました。ドイツから帰国するや2002年から本館改修WGの委員を命じられました。大掛かりな工事ですが、工事中も本館の教室で講義ができ、研究教育に支障がでないようにするにはどうしたらよいか頭を悩ました。それまで各学科講座ごとにもっていた講義室体制をやめ、共通の学部講義室でまかなえるように工夫しました。移動工事中の時間割編成はひとえに当時まだ若かった大瀧助教授の尽力の賜物です。建物の配置にも将来のことを考えて1、2階正面は本部事務施設 右袖は食物 3階に人間生活学科3講座を集約しました。人間生活学科のフロアのかかなりの部分は資料室で占められています。かつては学科講座ご

とにもっていた講義室の学部共用化を行い、必要面積の捻出と節約をはかりました。人間生活学科各講座は旧来の管理面積を大幅に減らすことになりましたが、このとき資料室の整備が飛躍的に進みました。全学の事務管理部门が本館一階二階にはいったことによりどの部局よりも清掃と安全管理が行き届くようになっていきます。この作業を終えたとき、お茶大への借りは返したと思いました。大学院の学系長と専攻長を合わせてちょうど3年やって新専攻をたちあげたわけだし、もういいだろうと思って、それからは精神的にエゴイストになって、自分の研究や約束した仕事の遅れを取り戻すことに集中しました。

研究への取り組み方も変えました。それまでは自分の元来の政治思想史の研究と比較家族思想史、生活政治学を別々のものと考えてしきりを設けて仕事をしていたようなところがありました。政治思想史・政治学の枠組みのなかで、比較家族思想史も生活政治学も考えることにしたのです。それでだいぶ頭のなかがすっきりしましたし、別々に存在していた問題意識や視角、問題構造が一つに統合されて捉えることができようになりました。学問のしきりを取りさることで、見えなかったものがよく見えるようになったといえますし、それぞれの科目が相互に有機的に結びつくようになりました。時間が足りないで苦し紛れの策だったのですが、これは自分自身にとって一つの意識の転換でした。

### (3) 最後の十年

2005年あたりに、定年までにこれまでの研究を二冊にまとめて出そうと計画し、そのまえに宿題となっている翻訳の仕事をひとつずつ片付ける作業に入りました。そういう生活を数年続けていたら、2010-11年度学部長に選出され、さらに2013-14年度人間科学系長に選出されてしまいました。結果として予定していた翻訳の仕事は、すべて終えましたが、単著二冊の仕事は残ってしまいました。数年のうちになんとか仕上げたいと思っております。

学部長のときに、なにか一つくらい学部の役に立つことをしなければと思い、一級建築士受験資格課程設置の可能性を探ってみました。当該学科がその気になれば可能であることがわかり、人間環境科学科に提案したところ、その気になってくれました。そのころ二学部化構想とかがでてきて生活科学部は股裂きにされる可能性がありました。この問題は、生活科学部は大学の「扇の要」という表現で凌ぎましたが、これは単なるレトリックではないと思います。その意味をもっと大事に考えるべきだったと思います。

人間環境学科が一級建築士養成課程の資格を得たとき、これで生活科学部は耐えられると思いました。昨年学内の発達臨床・心理学の2組織が合同し、心理学科が生活科学部にできることの学内コンセンサスがえられました。実現までまだ課題はあると思いますが、生活科学部は4学科体制となり安定した構成になると思います。すべての学科がそろって元気があるというのはなかなか難しいことで、いずれかの学科が代わる代わる勢いがあれば、全体としての学部の元気は持続します。学科のなかも同様です、全員そろって日の出の勢いとはいきません。いつでもだれか2、3人代わる代わる元気な人がいて、それぞれ自分の領域で頑張っていれば、その学科は全体として元気だといえます。そのためには年齢構成と専門の多様性と連関性が意外と重要です。

全学の教育組織を見ると大学院人間科学系の社会科学を構成する部分のねじれの問題が残っています。ささいなことのように見えるかもしれませんが、合意形成や全学的総合的判断をするときにみえないところで随分と障害となっているという印象をもっています。これは学内運営の最高レベルのところで感じ取れることで、それにかかわってみた者でないとなかなか実感としてわからないかもしれません。このねじれがなくなり、前期課程と後期課程が一本化すれば、お茶大の教育研究組織は、すっきりとしたものになり、なにかと風通しが良くなると思います。

この30年間この建物のなかで、いろいろ勉強させてもらいました。ここでなんとか一人前に育ててもらったという感謝の気持ちで一杯です。

西田幾多郎が晩年によんだ歌があります。最終講義を終えて、今の私の心境です。

ひはくれて  
みちとおけれど  
かくもけふはけふだけの  
なりはひはしつ

本日は私のつたない30年の歴史の総括におつきあいいただき、まことにありがとうございます。

2017年2月15日、本館306大講義室にて